

# 高齢者孤立の予防・解決のために地球レベルで出来ること

朴志修（韓国）

早稲田大学

## 1. はじめに

地球的問題と言われた際、すぐ思い浮かぶものは環境問題、貧困問題、民族紛争などであろう。高齢者の孤立が地球的問題だと考える人は少ないかもしれない。ところが、現状を見てみると話は変わる。全世界が高齢化している中、すでに欧州では独りで暮らす世帯の中で 65 歳以上の高齢者が占める割合が一番高く<sup>1</sup>、日本全国では 65 歳以上の高齢者が孤立死(死亡後四日以上経過)した数が 1 万 5,603 人と予想されており<sup>2</sup>、途上国のタイでも独り暮らしをしている 60 歳以上高齢者の数が 1986 年に比べ約 2 割も増加した。<sup>3</sup>

このように高齢者の孤立は先進国はもちろん途上国でも悩まされている「地球的問題」であるが、未だ各国それぞれの問題だという認識が強いようだ。そこで本稿では、高齢者が孤立する原因を示した上で高齢者の社会孤立を地球の問題として捉えることを提案し、最後に地球レベルの解決策については、既に行われている予防・解決策を参考にして考えてみたい。

## 2. 高齢者が孤立する原因

2000 年に厚生労働省社会・援護局長私的諮問機構が発表した報告書では、人が社会から孤立する原因が都市化と核家族化の進展、産業化、そして国際化の中で人々の「つながり」が弱まってきたことにあると指摘している。<sup>4</sup>また、孤立という現象に関しては、「いわば今日の社会が直面している社会の支えあう力の欠如や対立・摩擦、あるいは無関心といったものを示唆している」と分析している。<sup>5</sup>

特に高齢者の場合、人生の最期が迫っている。亡くなってからも孤立する彼らは、短くは数日間後、長くは数年後発見される場合もある。最期まで寂しい「孤独死」をして

---

<sup>1</sup> Juliet Stone , Maria Evandrou, Jane Falkingham (2013)

<sup>2</sup> ニッセイ基礎研究所(2011)

<sup>3</sup> Help Age International (2013)

<sup>4</sup> 「『社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会』報告書」(2000)

<sup>5</sup> 4 と同じ。

しまうことである。全地球が高齢化していく中、日本でも「孤独死」という言葉がマスコミでも良く取り上げられるようになり、2007年度から政府は孤独死対策を展開し始めた<sup>6</sup>。

ところが、社会から疎外された高齢者への援助と孤独死の予防への取り組みは、未だ各国内のレベルに止まっているように見える。そこで私は、高齢者の孤立がもはや「地球的」な問題であるならば、「地球」レベルで解決策を考えてもいいのではないかという点に気がついた。

### 3. 高齢化に関するマドリッド国際行動計画

高齢者の孤立の予防・解決策を考えるに先立ち、2002年第2回高齢化に関する世界会議で採択された「高齢化に関する国際行動計画2002」を踏まえておきたい。この計画では、高齢者の積極的な社会参加を可能にするよう求めている。中には、以下の2つのテーマが含まれている。

1. 所得を獲得できる労働やボランティア活動などを通じて、それぞれの社会の中で経済的、政治的及び社会的生活に完全かつ効果的に参加できるようにする
2. 高齢者は均質な集団ではないことを認識しつつ、…生涯にわたって、かつ晩年において、自己開発、自己実現及び福祉の実現ができるような機会を提供する<sup>7</sup>

しかし、現在の高齢者ケア政策は、高齢者を介護サービスの「客体」だけに限定しているように見える。もちろんそれが悪いとは思わない。ところが、人類の平均寿命がどんどん伸びている。最近では65歳頃に定年退職をしたからといって、「もうそれ以上は体力的に仕事が出来ない状態だ」とは限らなくなってきた。そのため、下記提案する案では、高齢者を経済活動の「主体」として活用できるような方法も一緒に考えてみたい。

### 4. 地球的な観点で考え得る解決策の提案—外国人の活用

高齢者の孤立を予防又は解決しようとする取り組みは、すでに長い間行われてきた。ところで、私が提案したい方法はプロジェクトの参加対象の中に外国人も含める方法である。まず、留学生も活用出来そうなフランスの事例を紹介し、これが他国にも適用可能かを検討してみたい。

フランスでは既に定着したコロケーション(colocation)という、若者と高齢者の同居プロジェクトが行われている。部屋の借主が同居人の居住地で夕方と夜を一緒に過ごす代わりに、大家さんは空き部屋を無料で貸してあげる制度である。借主は毎日の昼と週1回の夕方、月2回の週末そして3週間の休み期間に自由時間を持つことになっている。主に家を所有

---

<sup>6</sup>厚生労働省、総務省、国土交通省などによる「孤立死防止推進事業（孤立死ゼロ・プロジェクト）」(2007)や「高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議」の提言(2008)等

<sup>7</sup>内閣府のウェブサイト

している高齢者と地方からの上京し高い家賃の負担が出来ない学生が利用している。2003年から Ensemble 2 Generations 協会がこのプロジェクトを始め、2013年までフランス全域で約 1,700 件の契約が行われたという。<sup>8</sup>

このプロジェクトでは、下宿を通じて高齢者も若者も新しい人間関係を築くことが出来る。これを他国でも積極的に採用してもらうことはどうだろうか。その際に、外国人留学生も参加者の枠に積極的に入れるよう提案したい。

世界の中で最も高齢化が進んでいる先進国では、留学生を受け入れも盛んに行われている。先進国の高い家賃で苦しんでいるのは内国人だけでなく、外国人もいるだろう。自分も来日したばかりの頃は、日本ででの生活費が母国に比べ非常に高く、授業で習う言語と実際使われる言語との間には差があったため、辛い体験をした。実生活でも無理なく生活が出来るためには、会話を通じて聞いて話してみる練習が欠かせなかった。それで、もし私費留学生がこの制度が利用できるならば、生活費の負担を減らすことはもちろん、語学力も一層早く上達でき、このような制度を利用することで派遣先での生活にもより速いうちに適応できると推測する。

ただ、この制度を全世界に導入できるかは疑問が残る。他人と一緒に暮らすことに抵抗を感じる国の場合だったらこのケースが活用できないだろう。また、フランスのように学生時代から子供を自立させる国ではなく、逆に、学生時代には親の仕送りで生活することが当然と思われる国だったら、この制度を利用する必要はないと思うだろう。そのため、自国でも上手くいけるかについて、事前に十分な検討が行われる必要がある。

次に、定年退職した高齢者がお金を儲けながら、孤立から脱出できる事例がある。このブラジルのケースは、外国人の高齢者の孤立解決策に内国人が参加する事例である。CNA という英語塾では、Speaking Exchange という英会話プログラムを開発した。英語が学びたいブラジルの学生と、定年退職したアメリカの高齢者とを繋げるものだ。利用方法は非常に簡単である。学生がウェブサイトログインすると、オンライン状態の高齢者のリストがあり、毎回会話を練習する相手を選んでチャットルームに入る。二人は話したいテーマを決め、英語でビデオ通話をすれば済む。対話が終わったら [you tube](#) に非公開で映像がアップロードされ、添削も受けられる。<sup>9</sup>

これを他国でも積極的に採用してもらうことはどうだろうか。学習言語を英語に限定せず、日本語、韓国語等の言語に換えても需要があるだろう。その意味でどの国でも導入可能だと推測する。このケースは対象が内国人高齢者—外国人に限られる点はあるが、高齢者が労働を通じて「それぞれの社会の中で経済的、政治的及び社会的生活に完全かつ効果的に参加できる」方法である。また、言語学習サービスの需要者は若者だけでなく高齢者にも存在しうる点を考えると、高齢

<sup>8</sup> 韓国 SBS Special TV Program, 2014 年 3 月 3 日

<sup>9</sup> CNA Speaking Exchange ウェブサイト

者と高齢者の間で国境を越えた友達作りも「晩年における自己開発」も実現可能だろう。

## 5. おわりに

以上、高齢者の孤立問題について考え、外国人も参加対象になり得るフランス、ブラジルの事例活用を検討してみた。現在は高齢化が進んでいない国も、医療技術の発達によって高齢者が増加し、また経済成長に関しては都市化、産業化によって核家族化が進むと、いずれ高齢者の社会疎外問題に直面すると推測する。その点で、高齢者の孤立問題は先進国も途上国も貧困国も含んだ「地球の問題」と言っても過言ではないだろう。

それで、全地球が高齢者の孤立問題を環境問題、貧困問題並みの深刻さを持って、予防・解決策に取り組んで欲しい。全世界的な研究ネットワークを形成し、各国の試行錯誤と成功事例についての知識を活発に共有すること、またその際、活用する人材の枠に内国人だけでなく、外国人も入れることを提案する。そうすると、今までより新しい案、そして全世界が互いに支えあえる案が沢山見つかると思う。地球上の数多くの疎外された高齢者が、社会から見捨てられることを防ぐ方法も、社会に戻って来られる方法も見つかるだろう。

## 参考文献

- (ア) Juliet Stone , Maria Evandrou, Jane Falkingham (2013)  
“The transition to living alone and psychological distress in later life”, Oxford Journals, 1
- (イ) Help Age International (2013)  
“Global Age watch Index 2013: Insight report”,37
- (ウ) UNDESA Population Division (2013)  
World Population Ageing 2013
- (エ) CNA Speaking Exchange ウェブサイト  
<http://cna.com.br/speakingexchange/>, 2014年10月1日アクセス
- (オ) 韓国 SBS Special TV Program(03/13/2014)  
一緒に食事したら家賃がただ?…フランス「コロカシオン」 : 같이 밥 먹으면 집세가 공짜?...프랑스 '꼴로까시옹'
- (カ) 中沢卓美・結城康博 編(2012)  
『孤独死を防ぐー支援の実際と政策の動向』 ミネルヴァ書房
- (キ) 社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会(2000)  
『同検討会の報告書』, 1-3
- (ク) 内閣府ウェブサイト, 高齢社会政策, 高齢化に関する国際的な取り組み,  
「高齢化に関するマドリッド国際行動計画 2002」, 2014年10月1日アクセス
- (ケ) ニッセイ基礎研究所(2011)

「セルフ・ネグレクトと孤立死に関する実態把握と地域支援のあり方に関する調査研究報告書」の公表について,1